

「新建築」1955. 10月号

昨日、今日、そして明日へ 山口文象

近代という言葉を使う場合歴史学的には、どの辺からこの言葉を冠すべきなのでしょう、一九世紀の中葉、つまりイギリスが資本主義国家としての体容を一応整えた頃からと考えるもの、極端にはもっと前のヒュウニズム発祥の頃までさかのぼって規定するものもあります。近代絵画においてもピサロ、マネーから、または印象派にはじめて近代絵画の出発を見ようとするもの、マンホードのように未来派や立体派にはじめてその名を冠している人もあります。このことは、音楽にも文学についても同様にいえることであって、もちろん建築を考える場合も例外ではありません。私はここで「近代」を歴史学的な意味で追究したり、規定しようとするのではありません。ただ近代という言葉が粗末にせず、これから考えようとする今日の建築、すなわち現代建築との関連において、その近代をどのように概念すべきかを一応規定しておかないと不安だからです。

そこで日本の近代建築は何時頃からなのでしょう。一九一〇年代に活躍された後藤慶次氏や岩本禄氏の頃からとするのでしょうか。

または、一九二〇年（分離派建築会が出発した）をそれに当てるのか、これについてはいろいろの問題があり、史家の研究にまたなければなりません、私は分離派から近代がはじまったと考えたいのです。

これについてはこの結論があまりに性急であるとのそしりを免かれたいと思いますが、私なりの理由もあり他日機会を得て問題を提出することにしましょう。

その頃ヨーロッパではセセッションの運動からベーター・ベーレンスを経て、グロピウス、ローエの活動期に這入りようやく合理主義的な表現がその作品に芽生えはじめました。しかしまだローエのリープクネヒトの碑や、グロピウスの靴工場等に見られるように、アドルフ・ベーネが指摘するまでもなく、ライトの影響と、セセッションからの脱皮が完全にされていませんでしたし、一方メンデルゾーンのアインシュタイン観測塔やタウトのフリュウリヒトの運動に見られるようなロマンティズムの傾向のものもありましたが、全体的に見て近代合理主義のイデーが建築表現の上に急速に現われはじめました。

分離派建築運動は丁度これと前後してはじめられましたが、作品もその思想的裏付けもヨーロッパの合理主義と

は遠く後れて、ロマンティズムの傾向の強いものでした。これは明治時代の前近代的な様式主義の重圧から建築を解放しようとする、バイオニアのセンチメンタリズムと、気短かに云えばその頃の文芸思潮の主流であった白樺派芸術至上主義がまだ衰えずに、強い影響力をもっていた時代だと云うことも考えに入れるべきでしょうし、また当時の建築の生産技術が未成熟であったことも忘れてはならないでしょう。

しかしその頃はすでに、わが国は急テンポで近代資本主義態勢を整えはじめ、社会的矛盾もようやく増大しつつあったのであれば、分離派の建築活動を支える理論の上にも作品の表現にもなんらか違った結果が予想できたのではないかと。

このことは分離派が一応近代というステージに登場しながら、ほんとうの意味の近代精神から目をおおい、芸術至上主義の衣裳を脱ぎ捨て得なかったことに原因するのかも知れません。

これに対する可否の議論はともかくとして、日本の「近代建築は」このような誕生の仕方から「現代」へ発展してまいりました。やがてヨーロッパではグロピウスの「国際建築」や、ワイセンホーフのジートルンクが完成し、日本の建築家にも合理主義のイデーとその表現がどのようなものか判ったような気がして采ました。しかしあくまでも判ったような気がただけでプランニングメソッドの追究などは二の次ぎとしてまず「造型」でなければなりませんでした。そして構造はトロッケソバウ、椅子はブロイヤーのパイプです。ベルリソ郊外やフラソクフルトアムマインのジートルンクが雑誌によって報ぜられても、壁と窓と影のコンポジションが問題であり、アレキサンダー・クラインの「最小限住宅」のプランの研究を手にしても、そんなものはどうでもよかったので差し当りはまずラス下地のモルタル塗り木造のモダンな住宅を創ることにいたしました。こうして日本にも「近代建築」の隆盛時代が来しました。まことに日本の新しい建築家は幸でした。

しかしこの幸福なステージも、いつの間にか高潮がひたひたと水かさを増すように、気のついた時にはすでにファシズムの暴潮が足を洗いはじめ、モダニズムも国際主義も怒涛に押し流されそうになりました。一時は多少の混乱もあり身を挺して抵抗するものの中にはありましたが、そもそも犬山の鶴と同様にインターナショナルもリベラリズムも幸い腹中深く呑み込んでいなかったので、吐き出してしまえばそれまでのことです。

さすがに幾らかの後めたさはありませんでしたが、元来が自虐精神も自意識も過剰ではないからでしょう、そのまま

自然に国家主義的舞台へ鞍換してしまいました。こうして踵が地につかず自己確立のいとまもなくナショナリズムに旗印を持ち換え大陸侵略と太平洋戦争に捲き込まれてゆきました。わが国の進歩的建築家が身にしっかりとつけたと思われたヨーロッパの近代合理主義の理論も、リベラリズムも結果としては、このファシズムブームになんの抵抗もなしに屈服したことになるのですが、これはどう云うことなのでしょう。その当時の文献を見れば明らかですが、フランス、ドイツ、イギリス等では相等に活殺なレジスタンスが建築家によって展開されたのです。その結果がどうであろうと彼等の建築家としてのイデーが附焼刃でなかったことは確かであります。

昨年グロピウス夫人とナチズム旋風の恐怖の頃の想出ばなし等していた折、先生が信頼しフィーガーと共によき協同者であったドウストマンの噂が出ました。彼はヒトラー政権が樹立されると見るや直ちにその建築グループに登録し、党の指導的建築家としての位置を獲得しておりました。グロピウス夫妻がドイツを去る間に訪れて、ナチ建築の優位を主張し、先生の非を大いに難じたそうです。彼と共に水い間仕事をし、その才能と人間に敬意をさえていた私にはまことに意外であり、残念でもありましたが、彼の鮮かな転向には、その可否は兎も角として彼なりの主張すべき理論的根拠があったのでしょう。日本の指導的建築家にはこのドウストマンの信念さえもなく、頬かむりのまま牛を馬に乗り換え、ものさされる作品とは云えば、紫辰殿風のタイ文化会館であり、ミソギの建築であって、昨日まで軽蔑すべきものとして指弾していた、歌舞伎座や軍人会館のいわゆるヤマトイズムの隊列へ参加しました。

日本の近代建築家はこうして一〇年のブランクをどうにか凌ぎ得て敗戦を迎えました。われわれはファシズムの永い間の弾圧から解放され、人間の権利をもう一度に手にすることができました。天皇は人間宣言を発し、マッカーサーによって治安維持法が撤廃されて共産党の指導者達は G・H・Q の前でマッカーサーと共産党の万歳を三唱すると云うように急角度に状況が進展して来ました。

一〇年の虚脱はまだ意識的な立ちあがりにまでは程遠いことでしたが、地底からはかすかながら建設への足ぶみを感じられるようになりました。ここで近代建築家達はそっとあたりを見廻わして見ました。世の中はすでに、自由主義、社会主義、共産主義をいかに大声に叫ぼうとも唯一人咎めるものはいない民主主義の時代です。ヤマトイズムの頬被りをそっと脱いで、もとのステージへ再登場してきました。そしてこの戦争協力者達は建築にお

ける近代精神の先達としての場につきました。

当時分離派の近代建築運動から少し後れて、これに批判的立場から建築活動の中に社会主義リアリズムを打ち立てようとした運動が一方に起り、その作品にもまた理論的、実際活動にも効果ある実績を挙げておりました。しかし例の政治的暴力のために押しつぶされたかに見え、その消息も断続的でありましたが、よく敗戦までの永い間を堪え抜いて、細々ながら命脈を保ってまいりました。この系列に属する建築家と近代建築家はこの国の解放の明るさに目眩いを感じながらも、民主主義の立看板の下に新しい建築をどのように打立てるかと言う相談の会を結成いたしました。

世の中はファシズムからリベラリズムへと、急傾斜を非常な勢いでなだれ込んでいる時であったので、お互に自己の足もとを見極める暇もなく、ましてや相手の姿勢など分析している間もありません。とりあえず民主主義という筏の上で結婚式を挙げたわけです。

社会状況がようやく落付を取りもどし、気も静まってきましたので、お互を冷静に観察し合いますと、こんな筈ではなかったと云うような顔ぶれも見られます。それに筏は配給されたものですから縄もゆるんでいまいしょうし、束ねた材木もふぞろいで思ったように動きません。

米よこせの頃まではまだ共通の場において、ここから何か来たるべきわが国の建築への方向づけなどされるのではないかと希望が持たれましたが、朝鮮戦争を契機としてインフレーション景気が高まるにつれて建設事業が活き返り、言うところのビルブームが吹き巻くるに及んで近代派の建築と現実派との立却点の相違が判然とし共同の戦列を離れるものが多くなり、この運動もいつの間にか終息いたしました。

そしてこれを境として近代主義建築の華やかな活動期になるわけですが、そもそもの吾国の近代建築がそうであったように、これも海外の建築を除外して考えるわけにはゆきません。一〇年のツンボ棧敷から解放されて、まず目を見張ったのは海外の建築でした。グロピウス、コルビュジェの仕事、ローエ、サーリネン、遠くはブラジルの二ーマイヤの建築作品までがくびすを接して輸入されてきました。

元来歯は丈夫ですがよく咀嚼する習慣がついておりませんから、極端な例になりますが、二ーマイヤの作品かと見まごう公会堂が地方の小都市に出現するという珍現象も起ることになりました。そしてこの消化不良はコマーシャリズムと結びつくことによってますます植民地的近代建築への傾斜を強めてきています。

日本の近代建築がその発生の仕方においてどのような

矛盾をはらんでおり、そして今日までの累転のプロセスを見返えってきました。私は少しアイロニーに過ぎたかも知れませんが、しかし吾国の建築における近代主義がいかに揺れる芦のごとく無思想なものであったかを見通して見たかったのです。

このままで放って置けば吾国の本当の意味の建築はついに見失われてしまうのではないのでしょうか。今日のモダニズムも戦前のモダニズムの二の舞を演ずることになりましょうし、新しい構造主義も安手のアクロバットに墮し、原子時代のヒューマニズムの表現だと称する「原爆堂」も間違えば中世紀的な神秘主義の袋小路に迷い込むかも知れない。

しかし、人おのおの信ずるところに従って創作活動することは、全く自由であります。だから桂離宮一辺倒でもジャポニカでも、またはアメリカへのスーベニールに書院造りを輸出しても差支えないのです。

ただ私のいいたいことは、そうした建築家の制作活動が正しい建築をわが国につちかい得るかかどうかということとは疑問だと考えるのです。

前に述べたように、近代主義の建築家と現実主義的それとが、折角同一の基盤の上に立って新しい建築創造の方法論を打ち立てようと意図したにもかかわらず、何程の成果を見ずに解消してしまったのは何故でしょうか。言われるように指導者が両者を組織的にサスペンスしてゆく能力に欠けていた結果なのかも知れませんが、ありようは全く異質な基点と系列に属する両者である以上、より根本的な分析と堀下げを行うべきであって、形式的な統一などは同床異夢を強いる結果となって、失敗はすでに当初から予見されていたようなものです。

ここで私は両者の内包する対立の素因を抽出し解明して、結論を導き出すという能力も時間も持ちませんが、この「近代」と「社会主義」を弁証法的な把纏の仕方で見事に統一することはできないのでしょうか。

ドイツ文学者高橋義孝氏の文章の一部をここに引用させて戴きます。

ミラノの図書館に保存されている若きレオナルド・ダヴィンチの、ミラノの太守、潜王ロドヴィコ・イル・モーロに宛てた自己推薦状は、箇条書きに自己の才能、技術、長所美点を十カ条並べ立てている。「一、私は非常に軽い橋梁を作る手段を持っております。これは運搬に便で、これによって敵を追跡することもできれば、又、臨機応変に敵から逃げることもできるのであります。私はまた別の橋梁を作ることもできます。それは砲火に対して安全であり且つ戦いによって破損せられぬものであると同時に、取り外したり再び据えつけたりするのに容易

且つ便利なものであります。そしてまた私は、敵の橋梁に火をつけたり、それを破壊したりする手段も知っております」の如き自家吹聴の文が十箇条に及んでいる。そして最後の、第十番目はこうなっている。「十、平和の時代には私は建築並にまたある箇処から他の箇処へと水を引くことにおいて、他の何人に比較されても非常に立派に充分なことをする自信を持っております」と書き、行を改めて「同様に私は、大理石、青銅並に陶土で彫刻を作るでしょう。そして同様絵画においても、たとえ誰であろうと、その人との比較においてのみなされうるすべてのことをなすでしょう。更に私は閣下の御父君並に著名なるスフォルツァ家の不滅の名声と永遠の記念となるであろうような青銅騎馬像を製作するでしょう」と結んでいる。

私はこの文の引用によって、ダヴィンチのコソマージヤリズムと和戦両用をかけた芸術家としての倫理性を追究して、人間の格下げをしようと意図しているのではありません。ただ今日までの日本の近代建築家の無節操と無思想をよく表象していると思ったからなのです。思想の貧困は建築家をアルチザンに格下げするでしょうし、日本の近代建築に先き細りの栄養失調を結果させるでしょう。

日本の建築が永い間の植民地性から脱皮し、本来のほんとうの自分達のものを創りだすためには、厳密な自己批判と相互理解の上に立った忌憚のない討論がきびしく行われなければならないでしょう。ことに私は私達が重ねた過ちを、これからの若い世代の人達に繰り返えしてもらいたくないために一層強く望みたいのです。